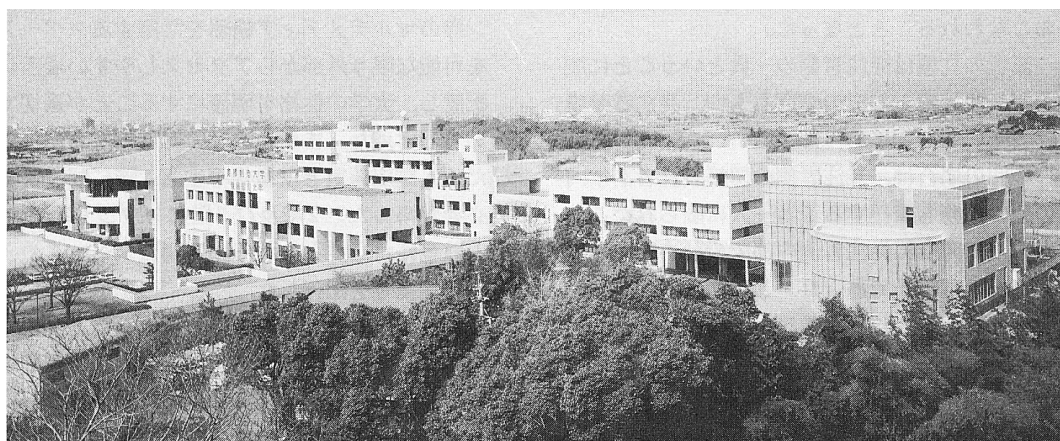


## 豊橋創造大学図書・情報センターの設計について

伊藤 晴 康

1. はじめに
2. 設計体制
3. 設計趣旨
  - 3 1 平面計画について
  - 3 2 外観デザインおよび  
インテリアデザインについて
  - 3 3 ディテールについて
4. おわりに



## 1. はじめに

96年4月の豊橋創造大学の開学<sup>1)</sup>にあわせるべく、旧豊橋短期大学のキャンパス施設の整備計画に筆者が参加したのは、94年の4月からであった。図書・情報センターは豊橋創造大学および豊橋創造大学短期大学部の教育・研究に関する情報の拠点として計画され、旧豊橋短期大学のキャンパスに立地する関係上新規の施設が少ないなか、新設大学としての個性をもたせるための目玉となる施設であった。本資料ではこの建物の設計の経緯とその設計趣旨についてまとめたものである。

## 2. 設計体制

筆者が計画に参画するようになった94年4月の時点では、おおよその予算をつかむための基本的な平面図と立面図が設計事務所によりすでに完成されていた。しかし、この図面は発注者側の与条件の整理が十分でなかったこともあり、各部に検討の余地を残すものであった。したがって、結果的にはその後改めて基本設計がおこなわれることとなった。

筆者の立場は発注者側の一員ということに加えて、設計者としての側面ももつ、発注者兼設計者という立場にあった<sup>2)</sup>。

今回の場合は、発注者側の建築設計者が学内の他の業務も兼任する筆者一人に限られたこともあって完全に発注者側内部で設計を完結させることは不可能であった。したがって外部の設計事務所として(株)竹尾建築設計事務所との共同設計という形式をとることとなった。

具体的には意匠に関する基本的なスケッチ図を筆者が作成し、この図をもとに設計事務所が構造・設備・電気といった技術的な調整及び実施設計図面を作成するという形で設計が進めら

れた。また、設計図が完成した後の現場監理についても発注者側から庶務部長と筆者が設計事務所の担当者とともに現場での定例会議に出席する形式をとり、意匠に関する見本や施工図の承認、仕上げ材料の決定は筆者がおこなった。

## 3. 設計趣旨

### 3.1 平面計画について

この建物に必要なとされた機能として、従来よりの書籍を中心とした図書館の機能に加えて、「図書・情報センター」の名前が示す通り、パソコン等のマルチメディア機器を利用した情報の活用スペースが要求された。また学内の事務局関係のスペースとして入試・広報室及び就職指導室も同じ建物のなかに併設する必要があった。

平面計画を練り直す過程で、学内関係者や学長の意見をヒアリングする等、発注者側の設計と条件を再検討した結果、パソコンを主体とした学習や研究活動のためのスペースを1階に設けることが妥当であるという結論に達した。経営情報学部という四年制大学の性格上、パソコン等のマルチメディア機器を活用するスペースを可能な限り外部からアクセスしやすい場所に配置し、大学の性格を明確にすることが適切であると考えた。また、本学の対外的な窓口にあたる入試広報室と就職指導室も1階に配置する必要があった。2階及び3階にはプライバシーと静寂性が必要とされる図書閲覧スペースや研究用個室等を配置した。

外溝計画においては、当初駐車場となる計画であった図書・情報センター前の敷地を既存の中庭と同じ素材で構成された庭園に変更した。限られたキャンパスの敷地のなかで駐車場を減少させることにはなったが、この庭園は外来者が最初に目にするようになる部分であり、キャン

1) 豊橋創造大学は旧豊橋短期大学の敷地に旧豊橋短期大学経営情報学部の施設を転用する等の形で設立された。旧豊橋短期大学の幼児教育科及び秘書科は豊橋創造大学短期大学部の幼児教育科及び秘書科と名称を変更して存続している。

2) このような設計体制は、完全に発注者側内部で設計がおこなわれる場合には、インハウスの設計と呼ばれ、一部のデベロッパーや官庁等でしばしばとられる体制である。

パス全体のイメージの向上に資すると判断した。また、図書館に求められる静寂性を確保することにも貢献している。

### 3 2 外観デザインおよびインテリアデザインについて

外観およびインテリアのデザインに関しては、以下の方針のもとにスタディを進めた。

- 1) 新設大学のシンボリックな建物とすること
- 2) 既存のキャンパスの建物との調和をはかること

既存のキャンパスに新築される建築物であるという性格上、既存の建築物との調和をはかることは当然要求される。今回の作品はこの条件に加えて、新設大学としての個性を表現するシンボリックな施設としての役割もこなうため、既存建築物との調和を保ちながらも単体の作品としての個性を出してゆくことが必要であると考えた。

既存のキャンパスは、モダンな外観の白い建築群が中庭をはさんで二つの列になり、キャンパスの北を流れる豊川の流れに沿うように配置されていた。「図書・情報センター」はこれらの建築群の東の端に位置しており、隣接する本館から壁面を7.5m雁行させて配置することで、雁行しながら連続するキャンパスの建築群との調和をはかっている。

単体の作品として求められるシンボリック性については、大学施設にしばしば見られる、歴史的な建築様式を模倣したデザインは採用しなかった。歴史的な建築様式を模倣することは、シンボリック性を獲得する上でありうる選択肢のひとつではあるが、「起業家マインドの創造」を掲げる新大学のデザインとしてはふさわしくないと考えた。歴史的な要素を付加して「大学らしさ」を「権威づけ」で表現するのではなく、新しい時代にふさわしい若々しさを表現したいと考えた。(写真1)

無論、近代的な外観を持つとはいえ、学校はオフィスでも工場でもない。大学のシンボリックであるこの作品では、学校にふさわしい精神の高

揚を表現することを意図した。

エントランスに設けられた3層の吹き抜け空間は、この「精神の高揚」をテーマに構成された。吹き抜け空間に隣接してコンクリート打ち放しの壁が床面から天井を突き抜けて立ち上がっている。(写真2)ここを訪れる者はこの壁に導かれるようにその傍らを歩く。前面をガラスで覆われたエントランスホールには白い光が満ち溢れている。ガラス面の内側に設けられたルーバーが垂直性を強調しながら規則正しく並び。(写真3)これといった特定の機能をもたない通過動線上の空間ではあるが、空間の巾に対する相対的な高さを十分に高くとることによって空間のヴォリュームを獲得し、訪れる人の心に深く印象づけられる特徴的な空間となることを目指した。白い光にあふれた空間に力強く立つ壁。白い光は「創造」のシンボルであり、力強く立つ壁は困難に立ち向かう「意志」のシンボルである。

エントランスホールに立つ壁は外観にも連続して表現されており、凹凸の少ない立面から突き出し、コンクリート打ち放しならではの力強い壁として表現されている。(写真4)外壁はアルミカーテンウォール、アルミスパンドレル、タイルによって構成され、全体の色調を既存のキャンパスの白色の外壁に調和させながらも質感によって差異をつけ、若々しさの感じられるシャープで明快な立面を構成することを意図した。

### 3 3 ディテールについて

3-2で述べたデザインコンセプトを実体としての作品に実現する過程において、ディテールデザインの果たす役割は非常に重要なものであった。ここでは特に重視した部分として、エントランスホール部分について解説する。

エントランスホールは前面をガラスで覆われている。このような構成の場合、ガラス面をどのように扱うかでその内部空間の性格が大きく異なってくると考えられる。この作品では、エントランスホールの空間自体をシンボリックなものとして扱い、空間に求心性を持たせたいと

考えた。そのため、ガラスの持つ透明という性質はあえて強調せず、外部との区切りであるガラス面を一定の奥行きをもった半透明のものとして扱った。このことにより、十分な明るさを確保しながら、囲われた領域としての内部空間の求心性を高めることができると考えた。

具体的には図1のようにガラス面の内側に約1mの巾をもったデッキとルーバーを設け、メンテナンス用の足場と日よけの機能を持たせている。デッキにはステンレスのグレージングを用いて軽さと半透明性を持たせた。また、ルーバーは布製であるため、薄く軽やかなものとなっている。ルーバーの垂直性を強調する意味でルーバーの室内側の先端部にそってスチールパイプを並べ、垂直性を強調し<sup>3)</sup>、吊り下げられた布の緊張感を演出した。

## おわりに

以上設計の経緯と設計主旨についてをまとめてみたが、一点強調しておかなければならないのは、実際の設計の過程においては様々な案が検討されては消えていったという事実である。建築設計は「正解」のない問題への挑戦である。様々な可能性を探りながらスタディを重ねる過程において、アイデアが生み出され、あるいはさらなる問題点が発見される。作品が完成して1年が経過しようとしている現在において、建築設計の過程を振り返り設計主旨をまとめたため、文章の上ではアイデアが一直線に具体的な形へと落とし込まれていったように感じられるかも知れない。しかし、実際の設計の過程はスケッチを描いては消すということの繰り返しで、「手を動かしながら考える」という形容がふさわしい作業であった。スケッチを描いては消すときに自分で求めていた「何か」を「言葉」で表現することが、作品の完成によってはじめて可能になったような気がする。

文を終えるにあたり、「豊橋創造大学図書・情報センター」の建設にともない設計過程でご協

力いただいた(株)竹尾建築設計事務所殿、施工を担当された鹿島・神野JV殿、そして発注者側のスタッフとしてご尽力いただいた本学関係者の諸氏に感謝の意を表したい。

3) 図 - 1A部参照



写真1：外観

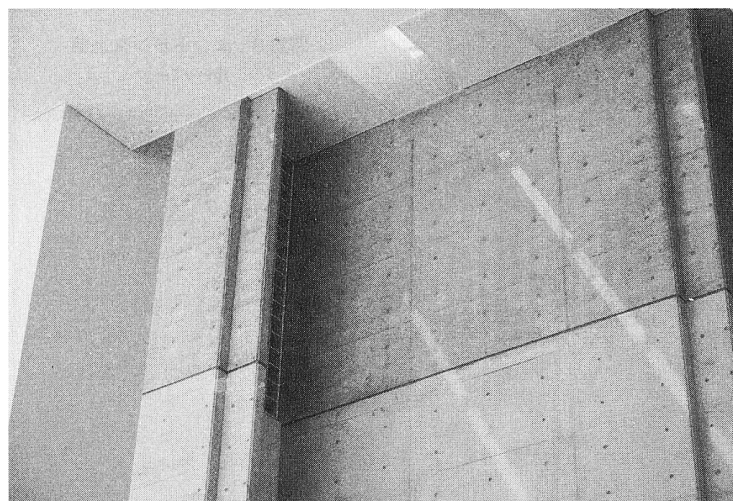


写真2：エントランス  
ホール見上げ

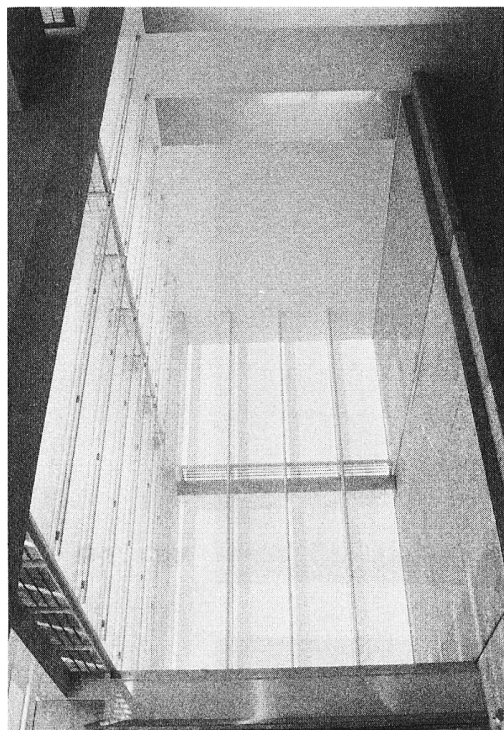


写真3：エントランス上部  
ルーバー



写真4：外壁

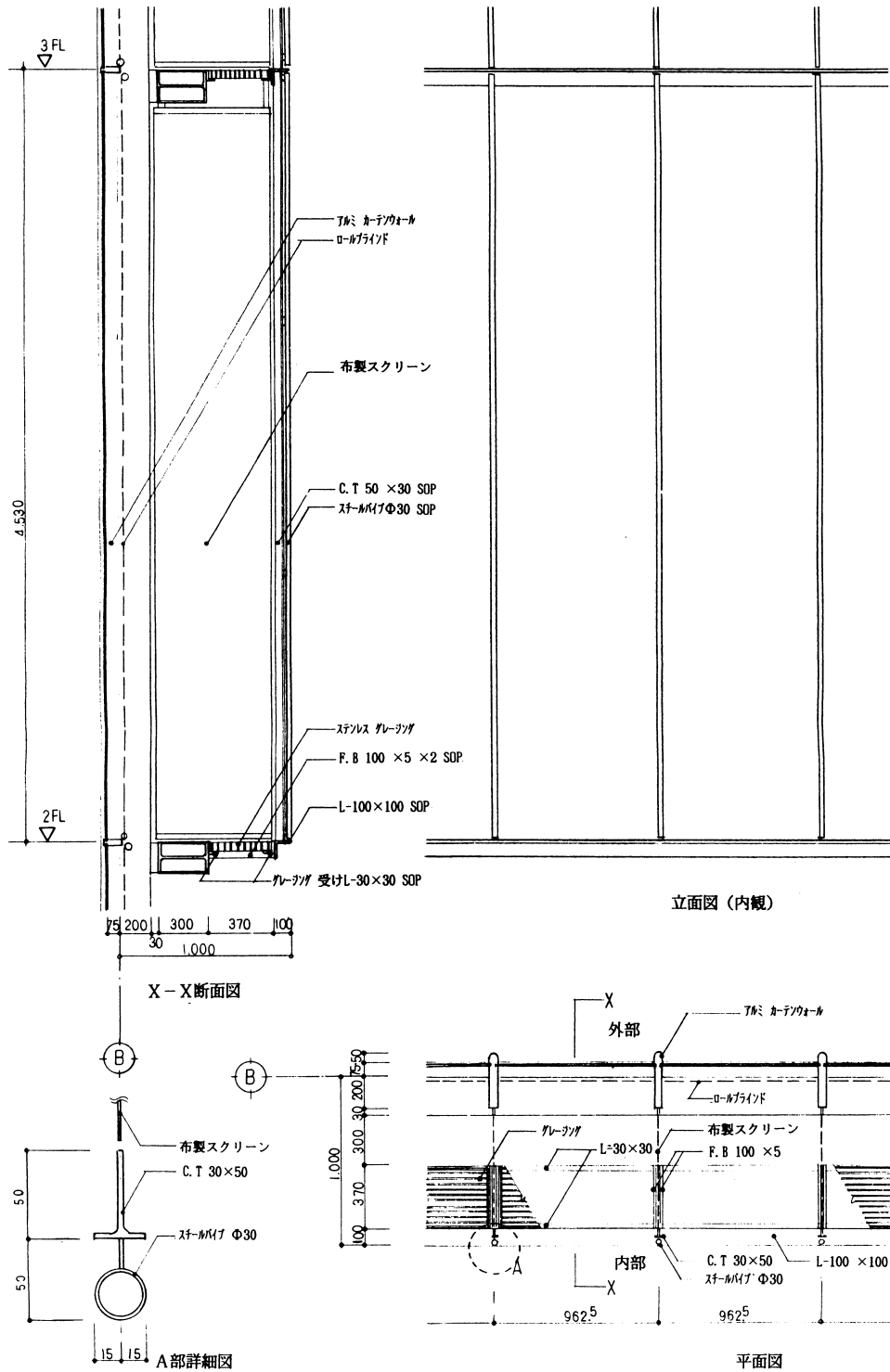
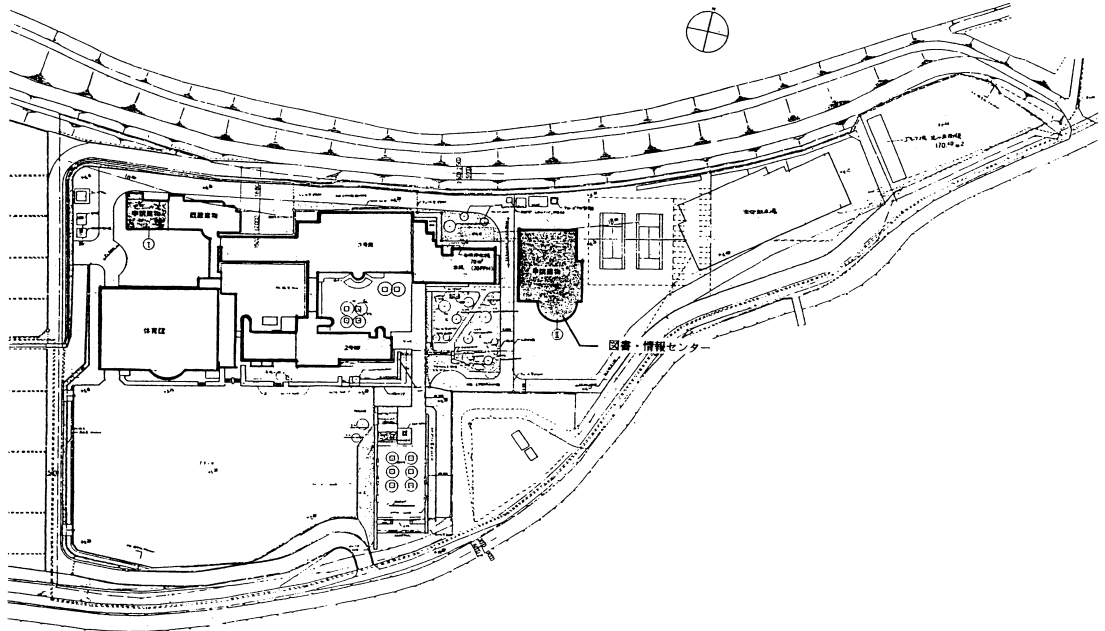
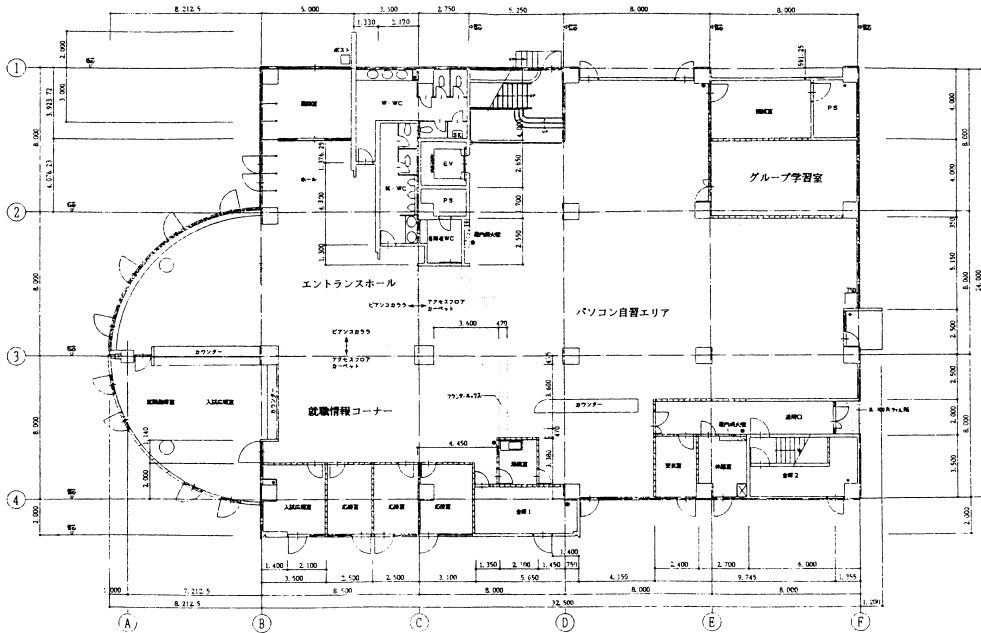


図 1 : エントランスホール・ルーバー詳細図

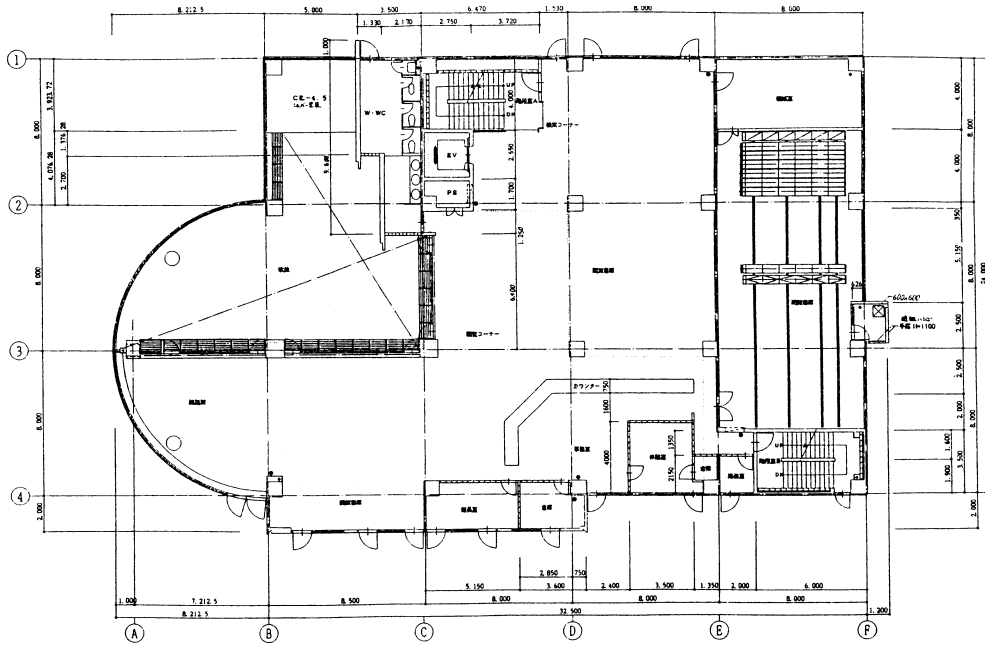


配置図

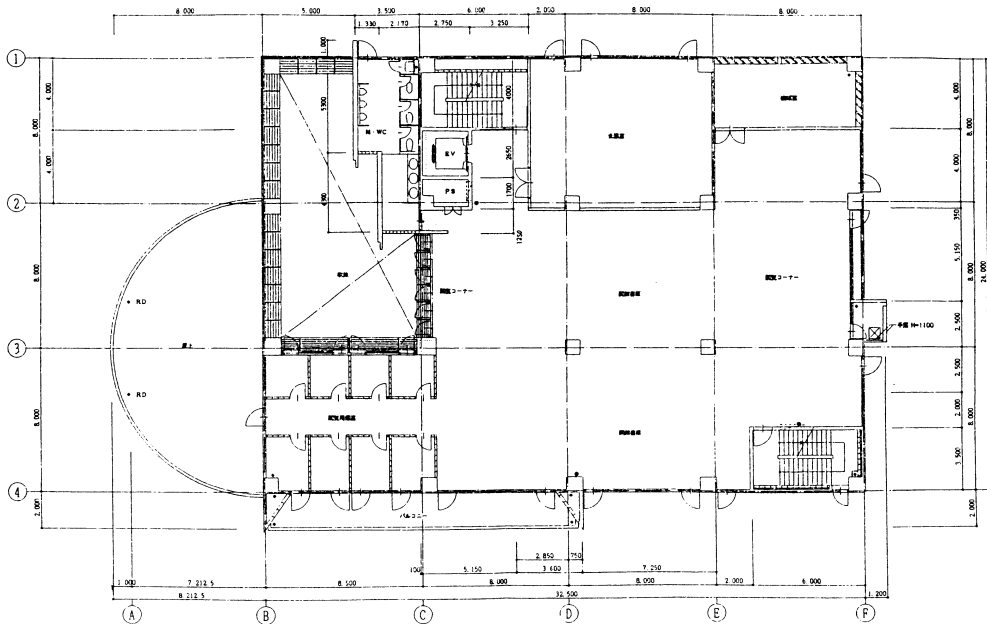


1階平面図

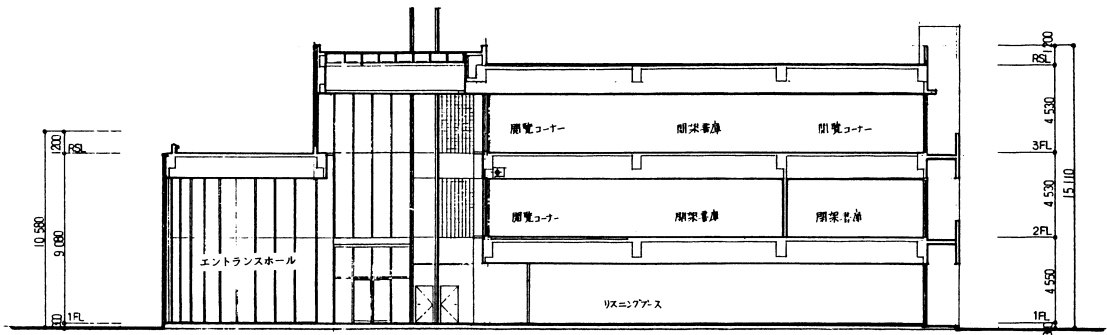




2階平面図



3階平面図



断面図

### 「豊橋創造大学図書・情報センター」建築概要

設計：伊藤晴康 + (株)竹尾建築設計事務所

施工：鹿島・神野JV

所在地：愛知県豊橋市牛川町松下20-1

用途：学校（図書館および事務室）

建築面積：920.835m<sup>2</sup>      床面積

1F：906.35m<sup>2</sup>

2F：754.78m<sup>2</sup>

3F：666.12m<sup>2</sup>

PH：14.68m<sup>2</sup>

合計：2376.93m<sup>2</sup>

構造：鉄筋コンクリート造

外部仕上

屋根：露出シート防水

外壁：磁器タイル，アルミスパンドレル，コンクリート打放し

開口部：アルミサッシュ，アルミカーテンウォール

外溝：インターロッキングブロック